

Oct.8,'98 名古屋パラダイスカフェ

地下鉄今池駅10番出口。地上へ続く長い階段を登りきると、そこは水溜まりの世界だった。伊達男には雨がよく似合う。とりわけ秋の雨がいい。じとじととへばりつくことなく、凍てついた震えを誘うことなく、道行く人々の肩をほどよくしっとり濡らす。街が滲んでいる。ふさわしい夜だ。そう思う。またしても地下へと続く階段を降りていく。その底の細長い通路を突き当たりまで歩けば、そこがパラダイスへの入口だ。レジで今夜のチケットをもらう。それはオンラインレジスターの味気ないものではなく、視覚と触覚を楽しませてくれるオレンジ色をした切符だった。浪漫はここにも転がっている。フロアは実に長方形で、短辺の突き当たりにはグランドピアノ2台分ほどのステージがあり、モニタースピーカーはステージ両側上空に吊るされている。見晴らしの良い空間。整然と並べられたテーブルと椅子。キャパシティは4050人といったところか。スタンディング・ライブなんてありえない、そう確信させるインテリアに店内スタッフの物腰。贅沢でシックな雰囲気。ここは、すでにかしづちワールドだ。

再びステージに目を移そう。向かって左側にはグランドピアノが鎮座している。中央には椅子とブームマイクが2本。唄とアコースティック・ギターのためのものだ。ガットギターはマイク内臓（ピエゾタイプ？）で、ケーブルが接続されている。右手にはローランド往年の名器D70が椅子付きで鎮座し、その右奥にはモジュール（サンプラー？）が設置されていて、MIDIで繋がれている。二人きりのステージング。

6時半オープン、8時スタートのライブ。客席は思い思いの飲み物と食事を楽しみながらその時を待っている。もちろん満席だ。ライダーズのライブ会場でいつもお見掛けする方々の顔も多いが、ステージ最前列あたりが女性客でしめられていたのも印象深い。さすがだ。

ほぼ予定時刻通りに店内が暗くなる。ステージにライトがあたり、二人の人影が浮かびあがってくる。

「こんばんは」

実にリラックスした微笑みを浮かべながら、まずはギターのチューニングを始めるかしづちさん。適度に残響が押さえられた店内に拍手が湧き起こる。サポートはLIBRAそして東京ローズの板倉さん。豊潤でどこか懐かしいロータリー・ローズ・サウンドが響き出し、ガットギターのつま弾かれた飛礫がライブのスタートを告げる。オープニング・ナンバーは石川セリへの提供曲「マルチネ」。恥ずかしながら僕はこの曲を聞いたことがなかった。何年ごろの作品かも知らない。しかし、これはまぎれもないかしづちナンバーだ。無国籍ながらどこか西欧の香り漂うメロディライン、不思議な浮遊感を持ったコード進行。それが70年代定番の音色に90年代のデジタルフレイバーをトッピングしたローズ・サウンドに乗せて唄われる。甘くやさしくアンニュイな、かしづちヴォイスで。

続いてハンドメイドのV Gというアコースティック・ギターと、同じくローズ・サウンドによる「Frou Frou」。オリジナルでは縦割りのビートが新鮮だったアップテンポの表版“S.E.X.”という雰囲気だったが、オリジナルの香りをどこか残した演奏にもかかわらず、かしぶちソロで奏でられるこの曲は、そのエロティシズムの根底から異なっているように感じられる。これはもう全く別の曲だ。慶一氏のヴォーカルが持つ強大な表現力が「まとわりつく粘着性」によるものだとすれば、かしぶちさんのそれは「肌をなでられる産毛の触感」とでも言うべきものだろう。二杯目のジンライム、飲み干して次はジンをショットで頼みたくなる。できればタンカレーがいい。

「僕はとても嬉しい」

弾き語りスタイルは今夜でまだ3度目のはず。にもかかわらず、この落ち着き払ったMC振り。ライダーズきっての伊達男、面目躍如である。

「ずっと、こういうライブでツアーするのが夢だったから」

人柄が滲み出る、そんな暖かいMC、本当に楽しそうなかしぶちさんである。最高に贅沢で、そして幸せな夜はこうして幕を開けたのだった。

続いてV G (アコースティック・ギター) とL Aシンセシスの真骨頂といった風のあるグロッケンスペシャルな音 (ビブラフォンの余韻を長くかつアタックを丸め全体的に耳触りを良くし、それにキラキラとした高域を足したような音・しかしD70自体の音は使われておらず、全てサンプリングされていたようにも思う) による「柔らかいポーズ」。アルバム“彼女の時”では矢野さん、大貫さん、石川さんという3大女性ヴォーカリストによるハーモニーを聴く事ができるが、もちろん今夜のこの曲はかしぶちさんお一人によるシンプルなソロ・バージョン。ベールのかかった淡いポーズが臉の上に浮かんで消えていく。

「アイドルに書いた」というMCで始まった曲は岡田有希子の「愛のコロニー」。V Gによるアルペジオに板倉さんの手によるメリーゴーランド風モチーフが絡んでいく。どこかフェアグラウンド・アトラクションを思い起こさせてくれるのは、やはりメロディラインが持つさりとした感触のせいだろうか。

続くはかのg l o v e (スペルあってます?) のM A R C (スペルあってます?) デビュー時の提供曲、「リベルテ」。この曲もまた始めて耳にした。V Gの時折はいるストローク、古典的シンセサイザーによるストリング・アンサンブル+フリューゲル・ホーンのようなバックিং・ギーボード。かしぶちさんの場合、提供曲とはいえ、どれもこれも自身のソロナンバーとしてなんの違和感も感じさせない。それほど希少な色彩を放っている。

ここで板倉さんが退場。笑顔で見送るかしぶちさんがかわいらしい。

「"f i n"から3曲ほど。エッチな曲です」

ご自身により"H三部曲"と紹介されたのは、ガットギターのアルペジオによる「エゴイスト」、ときおり入るストロークとボサ風アルペジオが美しい、V Gギターを手にした「オブジェの花」、再びガットギターに持ち替えシャンソン風ともボサ風とも感じられる爪弾きにより披露された「恋のためらい」という恋愛小説シリーズの名作達である。とりわけ印象的だったのは「恋のためらい」だ。アルバムでは映画音楽の巨匠ミシェル・ルグランのプロデュースにより彼のオーケストラが奏でる重厚なアンサンブルが印象的だったが、今宵のこの曲はシンプルなアレンジのためもあるだろうがヴォーカルの存在感が際立っていたように思う。芹口さんの手による官能的な歌詞はいくぶん女性口調なのだが、これがかしぶちさんの手にかかると中性的、もしくは第3の性を感じさせるといった一種独特な雰囲気を作り出してしまふ。いずれにせよこの曲に相応しいヴォーカルはかしぶちヴォイス以外にはありえないだろう。

ゆっくりとした動作でギターを傍らに置き、席を立つかしぶちさん。向かう先はステージ左側半分を占領するグランドピアノの前だ。鍵盤にそっと置かれた指先から繊細な調べが流れ出す。客席からは声にならないどよめきがおこる。ピアノの弾き語りによる「S . E . X」。この曲がこんな形で聴けるなんて。あくまで柔らかくアンニュイなヴォイス。淡々とした静けささえ感じさせる分散コード進行。高域の声の震えさえ愛しい。静寂の美。ショートカクテルの似合うもの憂げな夜。

続いてあの旋律が奏でられるのだ。マスターピースと呼ばれる選ばれた曲たちのみが持つ存在感。過ぎ去りし時の長さはその意味を無くしてしまう。ソロピアノによる「砂丘」、フルバージョン。気合の乗ったダイナミクス溢れるピアノプレイに同席していた友人のピアノ弾きも思わず美しいと声を漏らすほど。ワン・アンド・オンリーの耽美な世界が極まれる。

そして、鳴り止まぬ拍手を背に彼はステージを降りていく。

「しばらく、休憩です」

変わらぬ笑顔に柔らかな声。ご機嫌である。この夜の、誰も彼もが。再び客席の灯りが落ちていく。待ちわびた拍手の中、照らし出されたステージにご両人があらわれる。V G(ローランドのパーチャル・ギターじゃありません。ハンドメイドのアコースティック・ギターです)とシンセ・ヴォイス風というか、あのアルバム版にごく近い音色(おまけにシンクした鳥の鳴き声付き)のキーボードが、やはり柔らかなビートを刻み始める。『かしぶち哲郎SONGBOOK』でやっと日の目をみた「CLINIK A・ヴォーカル版」だ。うちのCDプレーヤーは幾度この曲を繰り返し再生したことだろう。今やオリジナル・インスト版の方に違和感を覚えてしまうほど。しかし、このアレンジだぞ。今宵のバージョンはこの曲の屋台骨となるサンプリング・リズム隊レスである。より一層ヴォーカル・ラインが強調されているのは言うまでもない。その上で感じるこの浮遊感はいったい何だろう。かしぶちヴォイスの無国籍感がより強く鮮明にその宇宙を描き出してくれる。まず不滅のメロディありき。かしぶちワールドの根底にはギミックもフェイクも無い。ただシンプルで自己主張の強い音のラインが脈打っているのだろう。

ガット・ギターに持ち替えアルペジオがつま弾かれる。往年のVCOシンセが得意とした暖かなストリングス・パッドがワルツに花を添える。まるで私小説のようなその紡がれた言葉たちは孤独にあこがれつつ愛を求める男のエゴと一服の寂寥感を醸し出す。「冬のバラ」、『リラのホテル』で聴かれたヴォーカルは15年の月日を経て抱擁感をも獲得したかのよう。今宵のかしぶちさんは、徹頭徹尾やさしさを滲ませている。

突然ビートが響き出す。おそらくはテープが使用されているのだろう。そりゃそうだ、この曲はテープじゃなきゃ無理なもの。数々の夜の中でもミキシングに最も苦労したであろう曲なんだから。「永遠のエントランス」。岡田伯爵のスウィート・ダミ・ヴォイスに変わって、今宵の入口はグッと押さえのきいたかしぶち・モノ・ヴォイスが導いてくれる。

伊達男の真骨頂、再び。

語り終えた男の真顔からフツと笑みがこぼれる。VGを手に歌い出す、「Deux Ciel s ふたつの空」。ピアノにストリングスをし たがえたキーボードが躍動感を増してくれる。この歌詞は岩室さんによるものだが、どこか「永遠のエントランス」にも通じる映像が思い浮かばされてしまう。深く、それでいて、透明な青の景色。

「次は、ムーンライダーズのツアーではやらなかった曲を...」

沸き上がる客席。

「僕の曲はやっぱり難しいみたいで... じゃあ一人でやるから今回はいいよってことになったんだ」

バンド、しかも手練のムーンライダーズが敬遠した二曲。これらを二人きりで、しかもオリジナルの雰囲気をつさえたまま再現してくれるとは。

まずはVGとスペーシー・フワフワ・シンセによる「君には宇宙船がある」。「WO O B A B Y」の大気圏バージョン、また「20世紀鋼鉄の男」に始まる俯瞰された地球の姿の最新版が、アコースティック・ギターでサラリと描かれる。あらためて感じる骨太なメロディとかしぶち天文学の魅力。

続いて地に降り立った男はギターのアルペジオとエレクトリック・ピアノというシンプルな音を背に「服を脱いで、僕のために」と歌い出す。ライダーズ・ファンにはたまらないプレゼントだ。この曲は博文さんの作詞だが、最初はてっきりかしぶちさんの手によるものだと思いこんでいた。「スプーン一杯のクリスマス」もそうだったけれど、かしぶちさんの曲に乗った博文節って、どこか浪漫の色合いが異なるように思えて仕方がない。それは博文さん自身が放つ強固なロマンティシズムと比較してのことだけれど。

「今までに書いた曲の中で、特に印象深いものをやろうかな。ムーンライダーズとソロのもの、一曲ずつ」

こんなMCに続いて奏でられた曲。僕の意識は驚きと納得の両境界を飛び跳ね回り出す。

アルバム『モダン・ミュージック』の色調はこの曲によって規定されているのかもしれない。漆黒の闇が柔らかなベールに包まれている。まるで幻想のように浮かんでは消える崖の光景。VGとシンセ・パッドのシンプルなアレンジが際立つ「BACK SEAT」。かしぶちイズムは何度も集大成されている。その記念すべき第一回目にあたる曲がこれだろう。今夜は、まずは、一人で唄われる「リラのホテル」。ガット・ギターのアルペジオにストリング・アンサンブルが彩りを添え、緑い庭を優しく燃え上がらせていく。

余談を挟もう。来るべく11月29日は記念すべき夜となるだろう。何を差し置いても僕は行くぞ。リラの花咲く、南青山MANDALAへ。

(注：チケットは店売りのみで残り僅かだそうです。お早めに)

<http://www.alles.or.jp/~ganchan/1129LIVE.html>

「じゃあ、『OK パ・ド・ドウ』を。この曲の最後、唄える？」

もちろん、と応える代わりに唄い出す客席。

「そうそう。じゃ、最後にこれを繰り返すので一緒に」

VGとピアノアンサンブルの音色が二人の恋を演出する。多重構造の競作であるメロディライン、その区切りがよくわかるアレンジ。かしぶちさんの歌声は歌詞の風通しを良くする効果があるらしい。オリジナル・K1ヴォイスのテイクでは時空うずまくSFスペクトルの世界が、切なく小粋な恋の歌に聞こえてしまう。もちろんどちらも大好きなことに変わらない。また新たな魅力を教えてもらった、そういうことだ。

やがてエンディングのフレーズに差し掛かると、いたずらっ子よろしく横目で客席をチラッとうかがうかしぶちさんだったりする。か、かわいい！客席から少しずつ歌声が響き出す。それを確認するかのように何度もリフレインするかしぶちさん。さながらソプラノ合唱団のような客席ユニゾン・コーラス隊。男のダミ声はほとんど聞こえてこないぞ。さすがだ。なんともなごむ光景だ。最後にもう一度客席に目をやり、板倉さんに合図を送る。ゆっくりとリタルダンドして迎える終焉。満足そうな笑顔を浮かべながらかしぶちさんが語りかけてくる。

「これをやりたかったんだよ」

本当に嬉しそうなかしぶちさんであった。見ているこちらまで幸せな気分させてもらう。ここで再び板倉さんは退場。さようならと手を振り見送るかしぶちさん。

一人になったステージの上でV G アルペジオの調べが今宵のラストナンバーを告げる。ムーンライダーズ初期のかしぶち作品の中で最も人気の 高い曲の一つだろう。オリジナル・テイクのこぶしは鳴りをひそめ、ひたすらクールにバスが行く。「Beep Beep Be オーライ」。語り掛けるように歌を紡ぐかしぶちさん。美しい。ひたすら美しい。とにかく美しい。

割れんばかりの拍手の中、軽く手を振りつつ伊達男はステージを後にする。すぐにうち揃う2ビートの拍手。待ちわびる血がそのテンポを速めていく。一度目のブレイクが訪れかけたころ、三たびご両人が仲良くステージにあらわれる。

「ありがとう」

満面の笑みをたたえてご挨拶。

「(アンコールを)用意してあるんだね。お約束というか...」

客席に笑みがこぼれる。あくまでも柔らかな物腰でV Gを手にアルペジオをつま弾き出すかしぶちさん。それを板倉さんが柔らかなストリングス・アンサンブルで包み込んでいく。聴いた事のない曲。古いカバーだそう。かしぶちさんのルーツが見える? タイトルは「火曜日ならベルギーよ」(special thanks to Mr.MOONDANCE)。どなたかこの曲をご存知の方いらっしゃいましたらぜひご教授くださいませ。

「『ひまわり』って曲、知ってる?」

とまどいながら沈黙する客席。

「あれ、知らないのかな」

思わず板倉さんと顔を見合わせるかしぶちさん。そんなことはありませんってば。みんな雰囲気浸って声をあげにくかっただけです。

「僕の記念すべき1枚目のソロに入ってる曲なんだけど、出だしに女性の声でコーラスが入ってるんだ。そこをやって欲しいんだけど。今からレクチャーするから」

レクチャー無しでも唄えますってば。でもこのパート、男には低過ぎるんですよ。ダミ声じゃ様にならないし(笑)

「じゃあ、やります。ついてこれる人だけついてきてください」

またしても笑顔でなごむパラダイスカフェ。V Gとピアノアンサンブルの音色が記念すべきファースト・ソロ・アルバムのオープニング・ナンバーをリードする。宙に浮かぶ柔らかな歌声が、今そっと地面に足をつける。幻想と現実の狭間で僕らは夢をみる。

夢がどんなに遠くとも、運命がどれほど重くとも、胸がときめくあいだは何も心配ない。
今夜、そっと、心をうちあげてもらったような気がする。永遠の伊達男の、深遠なる心、
を。

swing

HP 掲載に当たりオリジナル原稿より改行位置変更させて頂きました。
(檉の会 KRAFT.WARTZ)